

問題・解答 用紙番号	34
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
理工学部(住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科)、
農学部【文系科目型】(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I 次の傍線部1～5のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(一〇点)

私は愛を犠牲¹ケンシンの徳を以て律し縛^いめていてはならぬ。愛は智的生活の世界から自由に解放されなければならぬ。この発見は私にとっては小さな発見ではなかった。小さな弱い経験ではあるが、私の見たところもズンブン²にこれを裏書きする。私が創作のシヨウドウ³に駆られてヨウシヤ⁴なく自己を檢察した時、見よ、そこには生氣に充ち満ちた新しい世界が開展されたではないか。実生活の波瀾^はに乏しい、ゴドク⁵な道を踏んで来た私の衷に、思いもかけず、多数の個性を発見した時、私は眼を見張って驚かすにはいられなかったではないか。

(有島武郎「惜しみなく愛は奪う」)

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

第二次世界大戦での敗戦が日本語文学に及ぼした影響は量り知れない。戦前の日本では内地と外地が連続体として日本語文学に土壌を提供していたのだが、戦後になると、外地は内地において回想される以外に足場をもたない抽象的な「異郷」と化した。外地の記憶は戦後日本(旧内地)を亡霊のように徘徊し、空間の隙間やニッチにひっそりとおさまる以外にない、いわば異物となったのである。しかも、かつて外地と呼ばれた地域の大半は朝鮮半島内戦や中国革命、ソ連による領土回復によって旧内地人の記憶なるものをいつそ過去へと追いやつたばかりでなく、日々の報道が古傷のうえにできた瘡蓋かさねを剥ぐかのような拷問で引揚者の心を悩ませただった。戦地経験を描いた大岡昇平の『野火』(一九五一年)ばかりでなく、内地で銃後と焦土を経験した日本人と外地での記憶にすがりつくようにして生き延びた引揚者・復員者とがともに同じ時空を生きることの困難さを描いた阿部昭の『司令の休暇』(一九七一年)や後藤明生の『夢かたり』(一九七六年)など、外地との清算過程を描く戦後日本語文学の系譜は見逃せない。植民地朝鮮で書かれた『カンナニ』^{*}のような作品を、戦後日本人は朝鮮人との和解や共生の夢と困難を描くためではなく、そうした夢の実現不可能性を再確認するために書いた。これらをさしあたり「外地喪失の文学」^Aと呼ぶとしよう。

第二次世界大戦後のドイツで似通った現象が生まれたことは容易に想像がつくだろう。『ブリキの太鼓』(一九五九年)で知られるギエンター・グラスは一貫してこの立場を背負って生きた作家である。ルーマニア生まれのユダヤ系ドイツ人で、ホロコーストを生き延びて、戦後はパリで詩作を続けたパウル・ツェラーンまで含めると、戦後ドイツ文学における「外地喪失」の主題は「ホロコースト後」というもうひとつの重荷までまとめて背負うことになったのだとも言える。

そして第二次世界大戦後、戦勝国もまた広大な植民地を放棄することになったヨーロッパでは英語圏・フランス語圏からも少なからぬ「外地喪失の文学」が生みだされることになった。アルベール・カミュやマルグリット・デュラスにとって祖国解放後の時間は、旧植民地からの追放が決定的なものとなる重苦しい時間の連鎖だった。こうした系譜は、他方で植民地出身者が戦後も旧宗主国の言語で書きつづけることで新しいポストコロニアル文学の可能性を切り拓いたために、えてして背景に追いやられがちなのだが、第二次世界大戦後という世界史的な時間を考えたときに、日本語で書かれた「外地喪失の文学」は、旧西洋植民地出身者の文学と同じ尺度で測られる必要がある。長い長い植民地文学の伝統は、脱植民地化のプロセスのなかで「外地喪失の文学」と「脱植民地化の文学」へと分岐していったのである。

しかし、これまで「外地」^Bの範囲がどこまでかをあえて限定せずに筆を進めてきたのだが、はたして戦前の「外地」は敗戦を契機として内地日本人によって放棄された地域だけであつたろう

か？

明治初期の併合後も長いあいだ「内地」の外部に置かれてきた旧蝦夷地や旧琉球王国地域は、戦後日本領であることの国際的な追認や米軍占領から日本への返還などを経て「外地性」を否認されることになるのだが、このこと自体はこれからもなお歴史的に再審に付されるべきことだろう。

そしてもうひとつ忘れてならないのが、南北アメリカの日本人移住地である。出稼ぎであれ擬装的亡命であれ、南北アメリカに移り住んだ日本人の大半は「内地に籍を置く外地日本人」に準じる存在としてみずからを理解していた。彼ら彼女らの身元を預かるのが台湾総督府や朝鮮総督府、あるいは樺太庁や南洋庁、満洲国などではなく、日本国在外公館であったという違いは、当の日本人にはそれほど大きなものではなかった。アメリカ大陸の日本人がアジア諸地域の日本人とは異なる籠の鳥であると思われ知らされるのは、真珠湾攻撃（一九四一年十二月七日—アメリカ時間）以降である。しかも国際社会における枢軸国の孤立後、さらには日本の敗戦後も、現地日本人のほとんどは「外地日本人」としての自覚を失うことなく現地に残留することになるのである。

なぜこのようなことを蒸し返すかという点、「外地の日本語文学」を考えると、私たちは概して一九四五年八月十五日（日本時間）以降を度外視する傾向にあるからだ。日本統治・日本軍占領地域としての「外地」は、たしかにこの日付を境にして失われた。しかしアメリカ大陸の日本語文学は、戦後もまた「外地」的な特質を失わないまま微妙に形を変え、それでも残存したのである。そればかりかサンフランシスコ講和条約締結後、ふたたび日本人の渡航が活発化したアメリカ大陸では、戦前的な「外地の日本語文学」の遺産を部分的に継承しながら、戦後になってからも日本語による表現活動が一定の存在感を示しながら生き延びた。

「失われなかった外地」としてのアメリカ大陸——最後にふり返っておきたいのがこれである。

日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きるなかから成立した文学——「外地の日本語文学」として私が示した定義は、南北アメリカの日本人移住地の文学を考えると、そっくりそのままあてはまる。ここではブラジルの日本語文学^Cを対象を絞って移住地文学の外地文学性を考えておくことにする。

ブラジルの日本人移住地が活発な日本文学の拠点として急成長をとげるのは、一九二〇年代に入ってからである。初期の担い手は移民政策に乗った農業移住者ばかりでなく、大連や上海あるいはバタビアやシンガポールを転々としたタイプの流浪ジャーナリストや旅人であったが、しだいに入植経験者層へと裾野は広がった。そこへ一九三〇年には作家の卵であった石川達三が移民監督として、そして六年後には今度は老大家、島崎藤村がPENクラブ大会の帰りに現地を訪問することになる。生活圏は異なろうとも近代日本の刻印をほどこされた同士である日本人の同質性なるものと、これと対をなす内地日本人と外地日本人とのあいだの差異をめぐる二重の確認作業。渡伯作家の執筆スタイルは、他の「外地の日本語文学」のスタイルをほとんど踏襲している。後に慰問や犬

東亜共栄圏の文化政策の担い手として戦地へと徴用された作家たちのそれとも大きな差はない。

じつは石川達三や島崎藤村の背後に追いやられて、当時も戦後も日本国内でほとんど顧みられることのない移民作家の日本語文学もまた、こうした「外地の日本語文学」のスタイルから大きく外れることはないのである。黎明期の移民作家は移住後の経験を写しとるリアリズムを重視したが、現地ブラジル人に対する羨望や差別的なまなざし、同じ日本人でも在外公館や移民会社関係者に対する依存や反発、先輩移住者に対する同じく依存や反発などブラジル移民をとりまいた環境は、アジア地域の「外地」の場合と変わらなかった。強いて言えば日本語しか話せない自分に対するもどかしさがことあるごとに強調されて、それが特徴的なくらいである。そしてブラジル社会への同化が進めば進んだだけ、その同化方向の多様性が、ブラジル日本人が同胞を見る目の多様化をおおるかたちとなる。とくに第二次世界大戦期のブラジルで愛国主義者と同化主義者の亀裂が日本人社会を真っ二つに引き裂いてからは、1 が、どの「外地」と比べてもブラジルなど南米地域では極端なかたちで日本人ひとりひとりのなかに染みついたのであった。さまざまな日本人クルツの存在に脅え、憤り、魅せられる。戦後へと引き継がれたブラジルの日本語文学（コロニア文学）は、アジアの「外地」では志なかばで放棄された外地日本人の相互慰撫、ないしは相互監視の網の目を描きたす文学ならではの可能性を、地球の裏側でひそかに追求しつづけることになった。

ブラジルの日本人社会で恋すべき異性を見出すことはさほど困難なことではなかった。^Xベルリンの太田豊太郎がエリスに魅せられたように、現地人異性にとりつかれる日本人男性もめずらしくはない。しかし離婚を阻止しようとする圧力は日本人社会のなかから間断なく及んでくる。南米の太田豊太郎は、ときとしてブラジル人と幸福な家庭生活を送りもするが、南米のエリスを見殺しにしたり見放したりすることも少なくない。そういった日本人同胞の逡巡に対して、ブラジルの日本語文学はただならぬ関心を抱きつづけた。それはブラジル日本人のひとりひとりが人生の各段階で突きつけられる自己決定権行使の諸相に、ことさらな関心を示すマイノリティ文学そのものの宿命であるといってもよいだろう。そこにお手本などない。登場人物の日本人は範例の列のなかでたえず溺れつづける。

そしてこうして戦前から戦後へと生き延びた「コロニア文学」と並走する形で、戦後の日本人作家もまたブラジルへと「巡礼」を試みることになった。高木俊朗、角田房子、大城立裕、船戸与一など彼ら彼女らは異世界に巻きこまれるようにして、ブラジル日本人のあいだをたらいまわしにされ、あたかも突然変異を起こした日本人の進化形をそこに見出したかのような驚きとともに、その迷宮体験を文学へと置きかえることに熱中した。

戦後日本人作家がブラジルを舞台にした小説を書く場合、それを純然たるエキゾティシズムだけで構成しきえることは一見容易にみえた。しかし、いったんブラジル日本人を登場させたとなん、小説は「外地の日本語文学」に絡めとられてしまったのである。

「外地の日本語文学」という問題を過去に封じこめることなく、今日的な問題としてあらためて引き受けること。私はそれを一方では『舞姫』を現代文学として読みなおすことの可能性として示したかった。

じつはサンパウロに滞在した二〇〇二年、私は現地の国際交流基金の要請に応じて講演をおこなった。日本人の移民体験と太田豊太郎の留学体験は明治以降の日本人の海外経歴を考えるさい、えてして 2 な姿としてとらえられがちだが、そんなことはない。サイゴンの港で手記を書き終えた彼は、あのあと心を翻してドイツに戻り、エリスとともにブラジルへと移り住んだかもしれないという話をしたのである。日本人のブラジル移民が軌道に乗るよりも先立って一九世紀、ブラジルに大挙して訪れた移民と言えばドイツ系であり、イタリア系だった。とくにエリスがそうであったようなドイツの零細民にとつて、ブラジルは夢溢れる新天地だった。このことをふまえて『舞姫』のありえたかもしれない後日譚を私なりに語ってみせたのだが、そのときの原稿をお読みくださったアルゼンチンの日系人の方から、あなたの夢想は夢想ではなく、ほんとうにそういう例があったのだと札幌農学校出身の農学者、伊藤清藏さんという具体例をあげていただいた。はたしてこの伊藤清藏博士は、ドイツ留学中に信頼を築きあげたドイツ人女性とともにアルゼンチンに渡り、ドイツ人としての特権を利用して広大な土地を手に入れた後、ペルーやブラジルから流れ着いた日本人脱耕者などを受け入れてアルゼンチンで成功した現地日本人社会の伝説的英雄のひとりだ。一九三六年、ブエノスアイレスを訪れた島崎藤村は、この伊藤清藏（I博士）との会見の様様を『巡礼』のなかに書きとめている。

「外地の日本語文学」は、けっして過去に封じこめられるものではない。ヨーロッパ人が地球のどこでもそうであるように、世界のどこへ行っても日本人は、分身としての、もうひとりの日本人を見出すことになる。あきれれるほど日本人は世界に散らばっている。彼ら彼女らはかならずしも内地の日本人には似ていない。しかし、たとえばサンパウロ市内を歩いていればただの日本人が日系ブラジル人と簡単に誤認される。それほど傍目にはそっくりなのだ。日本植民地主義の半世紀あまりは、こうした外地体験を私たちに与えないままアジア地域ではあつざりと幕を下ろしたのだが、外地とはそもそもこのような場所のことなのだ。私はサンパウロでそのことを思った。

「外地の日本語文学」に対する私たちの関心はけっして「戦後処理」の一部ではない。変質した同胞という他者を見るまなざしを獲得するうえで、^D外地という場所はいまなお選ばれた土地である。戦前の内地人作家が外地に惹きつけられたのもたんなる異国趣味ではなかったと思う。内地日本人に秘められた可能性の大きさを測りたいとき、外地はどうつてつけの驚異に満ちた場所はなかったのではないだろうか。

戦後六十年を過ぎて、いつのまにか日本人にとつての外地は地球のすみずみにまで拓けている。内地日本人であったはずの人間がいつのまにか日本人であることをやめてしまうような境域が。

* 『カンナニ』……小、中学時代を朝鮮で過ごした作家・湯浅克衛が一九三五年に発表した、朝鮮で育った日本人少年と現地の朝鮮人少女の悲恋を描いた小説。

* クルツ……ジヨセフ・コンラッドの小説『闇の奥』に登場する、アフリカ奥地で象牙取引に関する権力を握っていた人物。

問一 空欄 ・ に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|----------------------|---|-------|
| 1 | ア 遠く離れた日本へ回帰しようとする欲求 | 2 | ア 典型的 |
| | イ 自分と他者とのあいだの距離を測る習性 | | イ 代表的 |
| | ウ 現地ブラジル人との共生を模索する姿勢 | | ウ 対極的 |
| | エ 日本語しか話せない自分に対する劣等感 | | エ 先駆的 |
| | オ 出自の異なる相手を受け入れる同胞意識 | | オ 具体的 |

問二 傍線部「ベルリンの太田豊太郎がエリスに魅せられた」とあるのは、小説『舞姫』の内容に言及したものである。留学先のベルリンで踊り子のエリスと恋に落ちて免官となった若いエリート官僚の太田豊太郎は、親友の計らいで復職できることになりエリスを捨てて帰国の途に就く。この小説の著者は誰か。次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 夏目漱石
- イ 泉鏡花
- ウ 谷崎潤一郎
- エ 森鷗外
- オ 徳田秋声

問三 次の段落は、どの段落の前に挿入するのが適切か。その段落の最初の五文字を抜き出しなさい。

日本語文学の場合にも同じ見取り図をあてはめる必要がある。内地人引揚者・復員者の文学が前者であるとするれば、朝鮮半島や台湾出身の日本語作家たちは後者に含まれる。

問四 傍線部 A 「外地喪失の文学」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 戦後日本人は、外地の人々との和解や共生の夢や困難を「外地喪失の文学」に描いたことによつて、それが実現不可能であることを再確認した。
- イ 外地から引き揚げた日本人にとって、「外地喪失の文学」を読むことは心の瘡蓋を剥ぐかのような拷問を受けることに等しい経験となつていた。
- ウ 外地での記憶にすがりつくようにして生き延びた戦前の日本人は、戦後に生まれた日本人と同じ時空を生きることの困難さを「外地喪失の文学」に描いた。
- エ 戦後日本人によつて書かれた「外地喪失の文学」は、第二次世界大戦後に放棄された西洋植民地出身者の文学と通底するものがある。
- オ 第二次世界大戦後のドイツでも日本と同様の現象が起こつたが、「外地喪失」の主題は「ホロコースト後」というもうひとつの主題に置き換わつたと言える。

問五 傍線部 B 「外地」の範囲について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 真珠湾攻撃によつて南北アメリカに存在していた「外地」は失われたが、現地日本人は「外地日本人」としての自覚を失わなかつた。
- イ 旧蝦夷地や旧琉球王国地域は「内地」の外部に置かれてきたが、歴史的に再審に付すことでその「外地性」は否認されることになる。
- ウ 「外地」とは、内地において回想される以外に足場を持たない抽象的な「異郷」となり、亡霊のように実体のなくなった地域を指す。
- エ 一九四五年八月十五日を境に「外地」は放棄されたが、アメリカ大陸は日本人の渡航が活発化したことで戦後に「外地」となつた。
- オ 「外地」には、戦前に内地から移り住み、戦後も日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きつづけた地域が含まれる。

問六 傍線部C「ブラジルの日本語文学」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ブラジルの日本語文学においては、現地人異性との恋愛に逡巡する日本人同胞に強い関心が向けられていた。

イ 離婚を阻止しようとする圧力が間断なく及んでくるため、ブラジルの日本語文学には恋すべき異性を描くお手本がなかった。

ウ ブラジルの日本語文学は、あたかも突然変異を起こしたような日本人の進化形を文学へと置きかえることに熱中しつづけた。

エ 日本語文学に写しとられた移民作家のブラジル移住後の経歴は、アジア地域の「外地」の場合と結果的に大差はなかった。

オ ブラジルの日本語文学は、エキジティビズムだけでブラジル日本人を登場させたため、「外地の日本語文学」に絡めとられてしまった。

問七 傍線部D「外地という場所はいまなお選ばれた土地である」とあるが、筆者がそのように考える理由を五十字以内で説明しなさい。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

アメリカの各都市で黒人たちが警察暴力と対峙していた一九六七年、ストークリー・カーマイケルとチャールズ・ハミルトンが出版した著書『ブラック・パワー』のなかで、^A制度的人種主義という言葉は、公民権運動の新たな^{*}アジェンダとして設定された。一九六四年公民権法、一九六五年投票権法によって、差別的な隔離制度や投票権剥奪が解消・廃止されたが、都市における黒人に対する暴力や人種間格差は深刻な問題であり続けた。そこで、カーマイケルらが人種平等の実現に向けて問題視したのが、「五人の黒人の子ども」を燦殺するという人種的憎悪にもとづく行為だけでなく、「毎年五〇〇人の黒人の赤ん坊」を死に至らしめる制度的な欠如であり、「その状況を知らないかのようにふるまう」社会のあり方であった。

二〇二〇年五月の黒人男性ジョージ・フロイド氏への警察暴力をきっかけとして広がったブラック・ライヴズ・マター運動が問題としたのも、カーマイケルらによって i された制度的人種主義であった。警察や司法による人種主義は、半世紀以上のあいだに、より深刻な様相を帯びるようになった。人種暴力を内在化させてきた警察組織の構造的な変革を求める抗議デモの主張は、黒人以外の人々が「罪悪感」や「問題」を感じないように放置されてきた広範な制度的人種主義の解体を求める声へと広がった。

抗議デモの渦中、メディア上では「制度的人種主義」や「体系的人種主義」といった言葉が注目を集めている。日本国内のメディアでも、これまでの常套句であった「根深い人種差別」という表現に代わって、アメリカ人種主義をめぐる問題の深刻さを語る言葉として、「制度的人種差別」という語を目にすることが増えてきた。その一方で、「根深い人種差別」がアメリカ人種主義の特異性を強調するように使用されてきたように、「制度的人種差別」という言葉も、警察暴力や人種格差を生み出す具体的な機構をブラックボックス化して、結局のところ「根深い人種差別」を言い換えただけに見えることもある。このような思考停止を繰り返さないためには、人種主義への制度的な思考とは何か、ブラック・パワー運動以後の^B制度的人種主義批判が、どのように人種主義に対する理解と反人種主義の実践を変えてきたのかを考える必要があるだろう。

人種主義は、あからさまな暴力や憎悪表現のように「目に見える」ものだけで構成されるわけではない。制度的人種主義にとって、差別への意図の有無は決定的問題ではない。奴隷制や人種隔離の時代でさえ、差別や暴力を形作ったのは、特定の人種集団を貶めようとする明確な意図というよりは、集団間の優劣関係を検討の余地がない「当然のこと」と考える指向であった。一九六〇年代の公民権運動を経て、差別に関する規範意識や法的枠組は変化したものの、人種暴力や格差を温存するメカニズムは、より暗示的で間接的な行為の蓄積として制度化されている。そのようななかで

「差別の意図」の有無や「どう感じているか」だけを問題とすれば、「意図したものではなかった」という弁明や「認識の相違」で片付ける主観論に陥ってしまう。

法学者イアン・ハネイ・ロペスによれば、「意図」を問う差別観の前提には、行為を自己利益の最大化のための意図的な選択の結果と考える合理的選択理論があるという。この観点によれば、差別は合理的な利益追求のための行為の一つであり、そこには明確な意図の存在が想定される。しかし、一九六四年公民権法以降の人種エスニック関係において問題になったのは、人種差別的な意図が意識されないまま、再生産されている暴力や格差であった。そこで、ハネイ・ロペスは、新制度学派による行為論に着目する。行為を規定するものは、人々が無意識のままに依拠している背景規則であり、意識しない行動や判断が特定の人種的背景を持つ人々を不利な状況へと追い込む仕組みこそが、制度的人種主義なのである。

では、制度的人種主義はどのように機能してきたのか。そのメカニズムに着目したのが、頻発する「都市暴動」の調査のために連邦政府が一九六七年に設置した「市民的騷擾^{モブリング}についての全米諮問委員会（カーナー委員会）」であった。カーナー委員会は、大都市中心部に「人種ゲットー^{*}」が形成される背景として、警察との摩擦、失業、不十分な住宅、不十分な教育、貧弱な娯楽、政治の機能不全などの社会制度の不備があると指摘した。黒人が多く住む地域では、教育・医療施設が整っておらず、職業機会が欠如し、家族形成やその維持が困難であるとされる。1、「黒人であること」に自尊心を持つことができず、黒人コミュニティへの肯定的な帰属意識を持つことを難しくする。このような「負の連鎖」の発見は、南部の人種隔離制度よりも暗示的で見えにくい人種主義制度が、大都市圏に存在してきたことを明らかにした。

カーナー委員会報告書が描いた「負の連鎖」の図式は、明確な人種差別の意図を伴わないまま維持され、さらに拡大している。人種マイノリティを不利な環境に追い込む制度は、日常的なあらゆる場面に存在する。公立学校と私立学校のあいだには、教員編成や教育プログラムの差がある。大学入試は標準化試験の成績を重視し、雇用には学歴や職業経歴が求められる。住宅の賃貸や購入には、十分な資金と安定した雇用が必要である。いずれも、マイノリティを故意に排除するためだけに作られた制度ではない。高価な学費に見合った教育内容、大学で学ぶための学力、職業に必要な知識・技能・経験、安定した賃料の支払い能力など、それぞれは人種とは関係ないはずの、「合理的な」理由にもとづいて設定されている。しかし、多くのマイノリティは、その不安定な生活基盤ゆえに、これらの基準を満たすことができず、安定した生活や経済的成功から逸脱してしまう。

ハネイ・ロペスは、ここで挙げた基準が、意図せずして人種主義を再生産する「台本」の役割を果たしていると指摘する。警察官、裁判官、雇用者、教師、不動産業者などは、それぞれが置かれた制度のなかで蓄積された「台本」に従うことで、その判断がいかにも人種集団間の格差を再生産し

ているかを意識することなく、日常的な実践を積み重ねる。「台本」に従う行為が蓄積すれば、その一つ一つが人種マイノリティを不利な状況へと導く選択や行為であったとしても、過去の経験や蓄積に照らしあわせて正当化される「経路」が作られる。人種による不平等を組み込んだ制度は、「台本」と「経路」によつて維持・再生産される。その結果、ある子どもは、家族の維持すら困難な生活環境、制限された教育機会、そして自身の身体的特徴への否定的なステレオタイプに囲まれ、ロールモデルを見出すことが困難な状況に置かれる。それは、経済的に安定した家庭と豊かな教育機会のなかで自己肯定感を育んできた子どもの前に用意された「経路」とは、全く異なっている。制度的人種主義は、「台本」と「経路」によつて無意識の選択が連鎖する状況を、「当たり前」と受け止めるような態度として形作られる。^C「台本」と「経路」の相互作用は、一見「合理的な」基準によつて不可視化され、人種集団のメンバー以外に意識されることは少ない。

歴史と日常的な実践の蓄積のなかで構造化されてきた不可視の制度的人種主義に対峙するためには、何が必要だろうか。まず、不可視の構造を可視化する必要がある。カーマイケルらは、人々の無関心と放置の結果として「五〇〇人の黒人の赤ん坊」が命を失っていること、すなわち「数値」を提示することで制度的人種主義の存在を示した。人種集団ごとの死亡率、失業率、貧困率、大学進学率などの統計的数値は、見えない人種主義の構造が導いたものと考えられた。人種統計は、もともと白人社会から排除・隔離される対象を特定し、その権利や資格を制限する国家装置であったが、^D一九六四年公民権法は、雇用・教育・公的施設などにおける「非差別」の実現を求め、人種統計に新たな役割を与えた。歴史学者ナタリア・モリーナは、制度的人種主義を規定する「台本」とは異なった基準や考え方を提示し、人種集団を横断する連帯を喚起する「対抗台本」の存在を指摘している。公民権政策における「非差別」は、制度的人種主義の既存の基準を問ひなおし、その機構への介入を促すための「対抗台本」となった。

「非差別」という「対抗台本」に沿って、連邦機関は制度的人種主義の可視化に取り組んだ。たとえば、公民権法によつて設置された雇用機会均等委員会（EEOC）は、「差別的雇用のパターン」の調査のため、一九六六年から一定規模以上の企業を対象に従業員の人種別構成の調査を開始した。EEOCは、差別的雇用の存在を、従業員や技能職・管理職などのなかで特定の人種集団が占める比率によつて可視化した。第一回調査が明らかにしたのは、全人口の約一〇％を占める黒人が、ホワイトカラー職の二・一五％、熟練ブルーカラー職の四・一％しか占めていないという過少雇用の現実であった。

しかし、EEOCをはじめとする連邦機関は、可視化された差別に介入する十分な権限も資源も持っていなかった。そこで採用されたのが、非差別雇用のための積極的措置である。ここで、積極的措置は、企業や自治体の協力のもと、縁故採用の廃止、黒人の雇用を促進するための職の増加や訓練プログラム、黒人地区での雇用事務所の設置など、「非差別」を実現するための多様な取組を

含んでいた。司法もこの措置を支援した。連邦最高裁によるグリッグス対デューク・パワー社判決（一九七一年）は、意図や見た目の「中立性」にかかわらず、過去の差別によって規定される「現状」を固定化させることも、公民権法が禁じる「差別的雇用」に含まれると判断した。同判決は、白人を優先してきた既存の雇用制度が作り出した「現状」を変えるための積極的措置を擁護した。「非差別」の実現という「対抗台本」は、人種統計によって表現される不均衡を「差別」と認定し、その改善のための積極的措置の導入を導いた。

2、グリッグス判決以後のアメリカ社会は、制度的人種主義への問題関心を急速に失っていった。その理由の一つは、積極的措置を白人への「逆差別」と呼ぶ、新しい「台本」の登場であった。「逆差別」論は、過去の差別の蓄積のなかで形成された制度的人種主義の存在を無視して、積極的措置は白人の機会を制限する点で差別的であると主張した。そして、医科大学院におけるマイノリティ集団を対象とした特別措置入試の是非を問うた一九七八年のカリフォルニア大学理事会対バッキ判決は、白人受験者を除外する特別措置入試は、合衆国憲法の平等保護条項に反すると判断した。バッキ判決の論点は多岐に及ぶが、本論が注目するのは、判決が「社会全体としての差別」への救済措置としての積極的措置の正当性を退け、直接的・意図的に行使された差別のみを問題化したことである。社会全体に蓄積された「見えない」制度的人種主義への介入政策としての積極的措置は、導入から一〇年程度で司法の支えを失った。

イブラム・X・ケンデイが指摘したように、制度的人種主義時代の反人種主義は、差別的な意図があるかどうかではなく、その政策、制度、言動が、人種間の不平等を再生産するかどうかを問う。人種統計は不平等の存在を可視化し、「非差別」という「対抗台本」のもとで導入された積極的措置は、不平等を生み出す経路依存の仕組みを変えようとする実践であった。バッキ判決以降、積極的措置の手法は「多様性の実現」のために人種を他の属性と同じように考慮するという形式で、かろうじて継続している。しかし、「多様性」は、歴史的な人種主義への批判的アプローチを欠いており、制度的人種主義に対する「対抗台本」としては不十分と言わざるをえない。

二〇一三年に生まれたブラック・ライヴズ・マター運動は、マイノリティが生きる「経路」を狭く規定してきた制度的人種主義の存在を再度問いかける運動であった。そして、二〇二〇年の感染症危機は、死亡数や感染数といった「数値」によって、制度的人種主義の存在を再び可視化した。その禍中で相次いだ警察暴力は、「黒人の生命や生活」を蝕む構造を露わにし、人種の境界、そして国境を越えた危機意識を喚起した。それは、警察問題だけでなく、広範な人種主義、性差別主義、異性愛中心主義、植民地主義への抵抗を連鎖的に導いた。過去に人種主義者とされた人物の銅像の撤去も、「台本」を書き換えようとする動きの一つとして理解できるだろう。一方、ドナルド・トランプは「法と秩序」という使い古された「台本」を持ち出し、制度的人種主義の挑戦を矮小化させようと躍起^②になっている。

見えないとされてきたものが再び見えたことで、変化へのモメンタムが生じたことはあきらかだ。いくつかの自治体は警察の予算削減と改革に着手し、大量収監を導く刑事司法制度にも厳しい視線が注がれている。もちろん、日常生活の ii に組み込まれた制度的人種主義の「経路」転換は決して容易ではない。アメリカの人種主義をめぐる政治は、二〇二〇年大統領選挙をむかえて、まだまだ二転三転するだろう。それでも、日本を含めた多くの社会で、制度的人種主義に対する基本的視座と問題意識が共有されたことの意義は大きい。反人種主義への契機は、特定の人間集団の「生命と生活」を蔑ろにしようとする、あらゆる制度と政治に対して、開かれている。

(南川文里「制度から考える反人種主義」一部改変)

* アジェンダ……検討すべき課題。

* ゲットー……もともとは、ヨーロッパの諸都市で中世から近代にかけて設けられたユダヤ人の強制居住区域を指し、ナチス・ドイツがユダヤ人絶滅のために設けた強制収容所もこの名で呼ばれた。転じて、米国都市部では人種マイノリティが居住する区域がこう呼ばれる。

問一 空欄 i ・ ii に当てはまる語句として最も適切なるものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|-------|----|-----------|
| i | ア 誇大化 | ii | ア イニシアテイヴ |
| | イ 具体化 | | イ パラドックス |
| | ウ 普遍化 | | ウ ベネフィット |
| | エ 言語化 | | エ マイルストーン |
| | オ 形骸化 | | オ ルーティーン |

問二 波線部①・②の言葉の本文中の意味として最も適切なるものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|-------------------------------|---|-------|
| ① | ステレオタイプ | ② | 躍起になる |
| ア | 疑念を差し挿 ^{はさ} む余地もない定説 | ア | 覚醒する |
| イ | 社会に浸透している決まり文句 | イ | 心がおどる |
| ウ | 社会的に共有される偏った見方 | ウ | 動揺する |
| エ | 規範に対する狭隘で頑なな信念 | エ | むきになる |

問三 空欄 ・ に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|----------|
| 1 | ア しかるに | 2 | ア そのかわり |
| | イ それゆえ | | イ それによって |
| | ウ ともあれ | | ウ したがって |
| | エ ところが | | エ そればかりか |
| | オ たとえば | | オ しかしながら |

問四 傍線部 A 「制度的人種主義という言葉は、公民権運動の新たなアジェンダとして設定された」とあるが、制度的人種主義とは何かを端的に説明した箇所を本文中から四十字以内で抜き出し、初めの五文字を答えなさい。

問五 傍線部 B 「制度的人種主義批判」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 公民権運動を経て差別的な隔離制度や投票権剝奪が解消・廃止されたことで、人種差別に関する規範意識や法的枠組に対し鋭い批判の目が向けられるようになった。
- イ 一九六七年の「都市暴動」の調査により、大都市中心部に「人種ゲットー」が形成される背景要因が明らかとなり、黒人コミュニティの「負の連鎖」が断ち切られた。
- ウ 「差別の意図」の有無をめぐって弁明や主観論に陥らないために、行為を自己利益の最大化のための選択の結果と考える観点に立ち、差別の意図が明確化された。
- エ 人種とは関係のない「合理的な」理由にもとづく基準が日常的なあらゆる場面で設定されていることに着目し、基準を人種マイノリティに適合させるようになった。
- オ 人種差別的な意図が意識されないまま暴力や格差が再生産され、集団間の優劣関係が「当然のこと」として放置されるメカニズムが問題視されるようになった。

問六 傍線部C「台本」と「経路」の相互作用について説明した次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 被差別人種集団のメンバーは、「台本」と「経路」によって連鎖する無意識の選択を「当たり前」と受け止めている。

イ 職種や社会的役割をめぐって蓄積された「台本」に従うことで「経路」が作られ、両者によって制度的人種主義の不可視の構造が可視化される。

ウ 人種とは関係ない合理的な基準が「台本」として人種マイノリティに対しても適用されるのだから、その「経路」をたどれば「負の連鎖」は解消する。

エ 人種主義を再生産する「台本」に意図せず従うことで、そうした行為が正当化される「経路」が作られ、人種による不平等を組み込んだ制度が維持される。

オ 「台本」と「経路」は人種不平等を組み込んだ制度を成立させているが、ロールモデルがあればどんな子どもも自己肯定感を育めるようになる。

問七 傍線部D「一九六四年公民権法は、雇用・教育・公的施設などにおける「非差別」の実現を求め、人種統計に新たな役割を与えた」とあるが、このことについて説明した次の文の空欄 ・ に入る語句を、本文中からそれぞれ抜き出さなさい。ただし、Xは十文字以内、Yは十六文字以内とする。

人種統計が したことを受けて講じられた積極的措置は、 を変えようとする試みであった。